

戦後日本のフィクサーをめぐる研究動向

Research trends on political Fixers in Post war Japan

影 浦 順 子*

Junko KAGEURA

はじめに

政治・経済・外交など国家の重要局面において、公的な権力機構の外部から非公式に影響を及ぼし、ときにその意思決定を左右する個人や勢力は、ジャーナリズムを中心にしばしば「フィクサー」「黒幕」「首領」「影の実力者」などと称され、権力の不可視な側面を象徴するものとして描かれてきた。日本では、1976年のロッキード事件をひとつの契機として、児玉誉士夫をはじめ戦後に暗躍したフィクサーの存在が注目されるようになった。アメリカの航空機メーカー、ロッキード社による各国政財界への大規模な贈収賄が発覚したこの事件によって、これまで水面下で語られてきたフィクサーと日米政財界との密接な関係が社会的な議論の対象となったのである。とはいえ、非公式なルートを通じて行われる彼らの活動は公的な記録には残りにくく、また本人の社会的影響力が大きいほど、その実態に迫ることはタブーの領域であり続けた。そのためフィクサーに関する言及は、これまでジャーナリストや政治関係者の間での断片的な証言や秘話的な記述をもとに、暴露記事や自伝的評論あるいはノンフィクション小説の形で語られることが多く、学術的な研究対象としての位置づけは長らく曖昧なままであった。

しかし2000年代以降、アメリカで機密文書の公開が進んだことをきっかけに、新資料の発見や関係者の証言公開などが相次ぎ、戦後日本のフィクサーとその周辺を実証的に検証する研究が日米で進展するようになった。とくに占領期から1970年にかけて暗躍したフィクサーについては、アメリカの対日戦略や冷戦構造などの国際的な文脈

*経営総合学科－経済史

Department of Management Synthesis－Economic History

のもとで再評価が進んでおり、こうした研究の蓄積は、彼らが単なる私利私欲のための影の存在ではなく、戦後日本の経済的復興と保守政治の形成に重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。よって本稿では、戦後日本のフィクサーに関する近年の実証研究を概観し、現状の課題を整理したうえで、今後の研究の方向性を検討していきたい。

1. 機密文書の解禁

クリントン政権の末期、アメリカ議会は1998年に「ナチ戦争犯罪情報公開法」を、2000年に「日本帝国政府情報公開法」を制定し、アメリカの政府機関が保管するナチスと戦前・占領期日本の戦争犯罪に関する機密扱い記録の解除と公開を決定した。これにより敗戦国ドイツと日本においてアメリカの諜報機関が展開したインテリジェンス活動の実態が解明されるようになった¹⁾。なかでも約10万ページに及ぶ日本関係の機密文書では、GHQ（連合国最高司令官総司令部）の情報部として対日諜報戦を担ったG2（参謀第2部）と、戦時中の諜報部隊OSS（戦略情報局）の後継機関であるCIA（アメリカ中央情報局）による冷戦下での諜報活動の詳細が明らかとなった。具体的には、東アジアの反共工作の一環として、彼らが旧日本軍の軍人や右翼の活動家と秘密裏に結びつき、アメリカ側のエージェントとして育成し、利用していたことが実名と合わせて確認されたのだ。松本清張が「日本の黒い霧」と称した占領期の未解決事件に絡むこれら諜報機関の存在は、これまでも同時代のジャーナリズムや「小ヒトラー」の異名をもつG2部長チャールズ・A・ウィロビー少将の回顧録²⁾などをとおして広く語られてきた。しかし、具体的な実態や組織的関与の詳細については憶測の域を出ておらず、それが機密文書の公開を契機に歴史研究として検証可能となった

1) 戦後ドイツでCIAが展開した諜報活動として重要なものに「ペーパークリップ作戦」がある。本作戦は、ナチス・ドイツの科学者や技術者を極秘裏にアメリカへ移送し、ロケット開発・軍事技術・医学研究などの分野で活用することを目的としていた。これにより、ヴェルナー・フォン・ブラウンを筆頭とするドイツ人技術者がNASAの宇宙開発を主導し、また冷戦期のミサイル技術発展に貢献した。その全容を機密解除された文書などから分析したものには、アニー・ジェイコブセン著；加藤万里子訳『ナチ科学者を獲得せよ！』（太田出版、2015年）などがある。

2) チャールズ・A・ウィロビー著；延禎訳『知られざる日本占領—ウィロビー回顧録』（番町書房、1973年。改題『GHQ知られざる諜報戦—ウィロビー回顧録』（山川出版、2011年再版））では、G2部長としての活動や、占領下の日本における諜報活動の詳細が述べられている。とくにGS（民政局）との対立や、反共活動の推進など、GHQ内部での権力闘争や政策決定の裏側が明らかにされている。なお、訳者の延禎は、関東軍に所属した後、キャノン機関に派遣され、中国大陸での諜報活動に従事した人物である。そこでの経験をもとに、延禎『キャノン機関からの証言』（番町書房、1973年）を著している。

のである。

機密文書の詳細については、加藤哲郎（2010）、有馬哲夫（2010）、山本武利（2013）などの解説・分析があり、また2000年の解除以前にCIAの対日工作に迫った研究では春名幹男『秘密のファイル：CIAの対日工作』が著名である。また英語文献では、CIAの歴史を一次史料から検証したティム・ワイナー『CIA秘録』に加えて、ナチス戦争犯罪記録及び日本帝国政府記録省庁間作業部会（IWG）がまとめた論文集“Researching Japanese War Crimes Records: Introductory Essays”（2006）³⁾、テッサ・モーリス＝スズキ（2016）などがある。その他、CIAなどが収集・作成した日本人の個人情報「ネームファイル」と日本関連の情報「問題別ファイル」を資料集の形でまとめた加藤哲郎編『CIA日本人ファイル』（全12巻）、『日本問題ファイル』は、その後の研究の基礎的文献として不可欠である。

これらの先行研究をとおして、1) G2の指揮下にあったキャノン機関（Z機関、本郷機関）では、旧日本陸軍参謀本部の第2部長であった有末精三をはじめ、河辺虎四郎、服部卓四郎、辻政信ら旧軍人たちが戦犯を免れ招集されたあと、反共工作や国内外の諜報活動に従事していたこと⁴⁾、2) より親米的な政治勢力の育成を目指すG2と日本軍の再生を図る旧軍人たちの思惑をふまえ、河辺らを中心に「新日本軍」「日本の地下政府」を設立する計画が進められ、毒ガス隊や戦車隊を含む警察軍の構想や吉田茂暗殺計画などが立案されていたこと、3) CIAの個人ファイルには、岸信介、児玉誉士夫、笹川良一、緒方竹虎、正力松太郎など、戦後日本の保守政治やメディアの形成に深く関与した大物政治家やフィクサーたちの名前が含まれていたこと⁵⁾、4) 占領後G2との勢力争いから主導権を握ったCIAは、彼らの諜報ネットワークを継承する一方で、国粋主義的・帝国主義的野心をもった旧軍人や笹川、児玉などの右翼勢力と関係することに批判的であったこと、などが明らかにされた。本稿との関連では、3) と4) の事項が重要であり、これ以降、東京裁判でA級戦犯の容疑を受けるも訴追されなかった上記の大物たちが、戦後日本の再編過程において、いかなる手法で権力を掌握し政財界に影響を及ぼすようになったのか、またそれがCIAの対日戦

3) 全文は、以下のアーカイブから閲覧できる。（2025年3月アクセス）

<https://www.archives.gov/files/iwg/japanese-war-crimes/introductory-essays.pdf>

4) 具体的な反共工作（TAKEMATSU作戦、台湾義勇軍、暗号解読・通信傍受作戦など）の内容については、有馬哲夫「もうひとつの再軍備—緒方『新情報機関』と戦後日本のインテリジェンス機関の再建—」（『早稲田社会科学総合研究』第10巻3号、2010年）などが詳しい。

5) その他、確認された日本人ファイル名は以下のとおりである。秋山博、有末精三、麻生達男、土肥原賢二、遠藤三郎、福見秀雄、五島慶太、服部卓四郎（2冊）、東久邇稔彦、昭和天皇裕仁、今村均、石井四郎、河辺虎四郎、賀屋興宣、小宮義孝、久原房之助、前田稔、野村吉三郎、大川周明、小野寺信（2冊）、下村定、辰巳栄一、辻政信（3冊）、和知鷹二、和智恒蔵。

略とどのように関係したのかなどについて、実証的な人物史研究が進展するようになった。以下、それらの内容を整理していきたい。

2. 個別研究の進展

機密文書や米国公文書館の資料に基づく人物史研究は、日本では主としてメディア研究の専門家によって担われた。その先駆的な例が吉田則昭や有馬哲夫による一連の研究である。前述の加藤、山本らと共同でアメリカの公文書資料の調査・分析を進めてきた吉田は、『緒方竹虎とCIA：アメリカ公文書が語る保守政治家の実像』（2012）にて、緒方が戦後日本の保守政治の形成において果たした役割をCIAとの関係を軸に明らかにしている。緒方は朝日新聞主筆を経て戦時中は内閣情報局総裁として情報統制に関与し、戦後は吉田茂内閣で副総理・官房長官を務め、自由党総裁にまで上り詰めた人物である。メディアを舞台に国民の戦意高揚を推進したことなどから戦犯容疑を受けるも訴追はされず、政界に復帰後は反共政策と再軍備を重視し、日本版CIAの創設を模索した。本書によると、吉田の後継者候補としてCIAから期待された緒方には、「POCAPON」というコードネームがつけられ、日米インテリジェンス活動の橋渡し役を担うことが求められた。しかし緒方は保守合同を実現した直後に急死し、その死は自民党の主導権をめぐる新たな権力闘争を引き起こすこととなった。本書では、CIAの支援を受ける一方で、日本の政治的自立を模索しながらアメリカの意向を巧みに利用しようとした緒方の苦悩と駆け引きにも焦点が当てられている。

同様に後継者候補のひとりとして注目され「PODAM」のコードネームを与えられた正力松太郎については、有馬『日本テレビとCIA：発掘された「正力ファイル」』（2006）、『原発・正力・CIA 機密文書で読む昭和裏面史』（2008）の分析が重要である。正力は、警察官僚として特高警察の運営に携わり、読売新聞社主筆として軍部のプロパガンダに協力し、戦後は日本初の民間テレビ局・日本テレビ放送網の創設を主導するなど、戦後日本の放送事業に深く関与した人物である。軍部と結びついた戦時中の言論統制と戦争協力の責任を問われA級戦犯容疑者として収監されたが、釈放後は政財界への影響力を取り戻し、メディアを通じた世論操作や原子力政策の推進に努めた。有馬によれば、CIAは当初、正力を情報提供者として活用し、その後は対日情報戦略の協力者としてテレビ放送事業を通じた親米世論の形成に利用しようとしたことが明らかになっている⁶⁾。さらに正力は原子力平和利用の推進者としても活動し、

6) 現在の日本の電波行政や放送業界の問題を考えるにあたって、「正力構想」はその起点のひとつとして重要である。この構想は、正力がCIAの支援を受け、通信と放送を統合した全国的なテレビネットワークを構築し、日本をアジアの反共プロパガンダの拠点とすることを目指したも

CIAと連携して原発導入の世論形成を主導した。これにより、戦後日本のエネルギー政策においてもアメリカの戦略が深く関わっていたことが裏付けられた。正力のメディア戦略と原子力政策への関与は、日本の戦後復興と冷戦期の対米関係の形成において重要な位置を占めていたことが、機密文書を通じて明らかになったのだ。

加えて有馬『兄玉誉士夫：巨魁の昭和史』（2013）では、戦後日本を代表する大物フィクサー兄玉について、CIAの「兄玉ファイル」を中心に検証が行われた。兄玉は、国粋主義的な右翼勢力を基盤に、戦前は軍部や財閥と密接に結びつき、戦後は豊富な資金力と組織的な暴力を背景に政財界に巨大な影響力を行使した人物である。日中戦争期には、笹川の支援を受けて中国大陆で軍需物資の調達や諜報活動を担う「兄玉機関」を組織し、A級戦犯の容疑が解かれたあとは、鳩山一郎、河野一郎、岸信介、中曽根康弘を中心に自民党政権の資金調達や勢力工作の裏側を担ったことで知られる。

晩年のロッキード事件では、ロッキード社から政界への主要な資金ルートであったことが日米で大々的に報道され、世論の圧力を受けた特捜部の捜査で起訴に至るも、その経緯に関わるCIAと兄玉の関わりは多くの疑惑を残したまま不問に付された。また公判も健康上の理由で打ち切られるなど、兄玉の存命中に両者の関係が解明されることはなかった。ロッキード事件以前に、兄玉の実名をあげてその不透明な資金や人脈に切り込んだ最初の告発には竹森久朝『ブラックマネー』（1971）があるが、その内容が公になることを嫌った兄玉側の圧力により出版前に絶版となった逸話は有名である。こうした状況は、同事件を契機に一定の変化を見せたものの、兄玉の影響力が残るあいだは、猪野健治（1970）、竹森（1976）、立花隆（1976）などの一部評論を除くと、「彼の話は本当にタブーで、兄玉の『兄』の字でも書こうものなら、消されるんじゃないかという恐怖感があった」⁷⁾と述懐されるほど、公然と論じることは困難であった。そのため兄玉の裏社会での活動は、本人の自伝的著書『われ敗れたり』、『悪政・銃声・乱世』、『獄中獄外：兄玉誉士夫日記』や、ジャーナリズムで語られる悪評を通じて知るほかに客観的な検証が難しい状況が続いていた⁸⁾。機密文書の公

のであった。しかし、電電公社の強い反対により挫折し、日本のテレビ放送は「県域免許」制度が採用された。その結果、地方局は在京キー局からの「電波料」に依存する現在の放送構造が形成された。詳しくは池田信夫『電波利権』（新潮新書、2006年）を参照。

7) 保阪正康、佐高信、森功の鼎談（「戦後70年特別鼎談：兄玉誉士夫 笹川良一 瀬島龍三 四元義隆ほか「黒幕たちの戦後史」を語りつくす」『週刊現代』2015年1月）にて、佐高が発言した内容である。

8) 兄玉と思われる人物が登場する小説には、松本清張『けものみち』（1964年、鬼頭洪太）、石川達三『金環蝕』（1966年）、村上春樹『羊をめぐる冒険』（1982年、先生）などが挙げられる。これらの作品では、政財界と裏社会を結ぶフィクサーが物語の鍵を握っており、実名を出すことができなかった時代に、フィクションをつうじてその存在が暗示された。

開は兄玉研究における転機でもあり、本書ではとくに、これまで断片的な証言や報道に依存していた兄玉とCIAを主とする諜報機関の関係が再検討された点が特徴である。有馬は、CIAのほか、G2や国際検察局などが記録した兄玉に関するアメリカ側の膨大な資料や関係者の証言録を渉猟し、ジャーナリズムのあいだで頻繁に語られてきた「兄玉＝CIAのスパイ説」とは異なる視点を提起した。

具体的な内容は、以下のとおりである。1) 国粋主義の復活分子となることを危惧され巣鴨刑務所に収監された兄玉は、兄玉機関での活動を背景に、次第に日本の右翼勢力や軍関係者の機密情報を密告するアメリカ側の重要な情報提供者となった。釈放後は、G2が指揮する反共工作（台湾義勇軍など）や密輸に関与したり、逆コースの強化をCIAと連携して行うアメリカ対日協議会（通称「ジャパン・ロビー」）のもとで、秘匿していた国内鉱山のレアメタル調達に奔走したりするなど、戦前からの人脈・流通ネットワークを駆使して、積極的にアメリカ諜報機関の「下請け」を担った。2) しかし本書によると、兄玉とCIAの蜜月時代は占領期までであり、日本の独立をもって兄玉は自らのイニシアティブで日本の保守政治家に関わる「政治プロデューサー」に転じたとされる。その転機の目的とは「自主防衛の実現」「高度国防国家の再建」であり、以後兄玉は、これを推進する政治家の育成に力を注ぐこととなった。一方、この方針は日本の安全保障をアメリカ主導で維持しようとするCIAの意向と対立するものであり、その結果として兄玉はCIAから警戒・敵視される存在になったと整理される。こうした解釈は、CIA「兄玉ファイル」における兄玉評（「諜報工作員としての価値は事実上ゼロ。職業的な嘘つき、ギャング、ペテン師、根っからの泥棒」など）とも一致している。そのうえで本書では、「自主防衛」を政治課題にあげた鳩山、河野、岸、中曽根らと兄玉の関わりが分析されている。3) ロッキード事件に関しては、50年代後半から本格化する主力戦闘機の機種選定をめぐる航空機メーカーの競争のなかで、兄玉がロッキード社の秘密代理人となり、政財界への資金供与をつうじて影響力を拡大した過程が詳述されている。また本書では、日米安保の再編を図るCIAが、岸政権への資金援助を強化するため、グラマン社に働きかけ資金工作を促した可能性についても言及している。アメリカの航空機メーカーを介して日本の保守政権を掌握するという戦略において、兄玉とCIAは同じ手法をとりつつも、最終的な目的の違いから微妙な競合関係を保持し続けたのだ。

なお、ロッキード事件と兄玉の関係については、奥山俊宏『秘密解除：ロッキード事件』（2024）が最新の研究成果を示している。ロッキード事件についてはいまだ不明瞭な点が多いが、本書は、なぜ事件はアメリカから発覚し、田中角栄だけがスケープゴートにあったのかという論点が、アメリカの機密文書をもとに掘り下げられている。兄玉との関連に限ると、本事件の黒幕である兄玉と影響下にある中曽根に追求が及ばなかった政治的背景には、兄玉とCIAの関係から対日諜報戦略の全貌が露見する

ことをアメリカ側が牽制したことに加え、国内における反田中勢力も自民党の基盤を揺るがすスキャンダルの深追いを避けた点が指摘されている。

以上、機密文書の公開から研究が進展したCIAと大物政治家・フィクサーの戦後史について概観し、彼らの関係が、一方的な従属や協力というだけでなく、対立と競合が絡み合う複雑な力学のなかで展開されていたことを確認した。なかでも兄玉は、日本を反共主義の主要国とする目的においてCIAと共闘しつつも、自主防衛の強化に向けて独自の権力基盤を築き、次第に対立を深めた点で特異な存在であった。この構図は、戦後日本の保守政治が、アメリカの冷戦戦略の影響を受けながらも、日本の政治・経済・軍事的自立を目指すフィクサーたちの思惑と駆け引きによって形成されていたことを示している。もっとも戦後日本のフィクサーの全体像を理解するためには、CIAに関係した大物政治家やフィクサーを取り上げるだけでは不十分である。笹川良一、田中清玄、瀬島龍三など、アメリカの政府機関や多国籍企業と一定の距離を取りながら、独自の手法で影響力を行使したフィクサーたちについても、今後はより深く研究を進める必要があるだろう⁹⁾。したがって、以下これらの点も踏まえたうえで、今後のフィクサー研究の課題を簡単に整理しておきたい。

3. 今後のフィクサー研究の課題

学術的な研究としては、発展途上にあるフィクサー研究が、今後より包括的・国際的な研究領域として確立していくためには、特定の人物や事件に関する個別の実証分析と並行して、より広い視野のもとでフィクサーの実態を位置づけていくことが重要である。この観点から、戦後日本のフィクサーの研究課題を考えると、差し当たり次のような論点が挙げられる。

1) 国内資料の開示と活用：これまで見たように海外の機密文書の解除は、戦後日本のフィクサー研究を大きく進展させた。本稿では詳述できなかったが、英米の機密文書から兄玉とライバル関係にあった右翼の大物フィクサー田中清玄の生涯を評論した徳本栄一郎（2022）や、米ソの機密文書を用いて戦後日本の政党と秘密資金の関係を検証した名越健郎（2023）などは、研究の視野を広げるうえで重要な知見を提供している。日本政府の情報公開が遅れる限り、このような海外資料に依拠した研究手法は、今後も継続していくと考えられるが、一方で日本側の視点や文脈が十分に反映されにくいという課題も残る。こうした状況に対応するためには、国内資料の一層の開示が

9) 笹川、田中、瀬島の生涯と影響力を知るための代表的な評伝として、伊藤隆『評伝：笹川良一』（中央公論新社、2011年）、田中清玄『田中清玄自伝』（文藝春秋、1985年）、保阪正康『瀬島龍三 参謀の昭和史』（文藝春秋、1989年）が挙げられる。

不可欠であるとともに、日本における既存の公文書や関係者の証言、歴史研究の成果を総合的に活用する視点が求められる。とくに、戦後日本のフィクサー研究においては、戦後政治学の泰斗である伊藤隆を中心に蓄積された政治家のオーラルヒストリー、回顧録や日記、新聞雑誌の特集記事などの一次史料が重要となる。伊藤の遺産と言えるこれら膨大な資料群には未活用のものや、これまで十分に分析されてこなかったものが多く残されており、これらは公的権力とフィクサーの関係を解明するうえで不可欠な手がかりとなるだろう¹⁰⁾。

2) フィクサー研究の視点拡張：これまでの研究は、メディア史の専門家が主導したという経緯から、戦後日本のフィクサーをアメリカの諜報機関とくにCIAとの関係から論じる傾向が強かった。しかし、彼らの多くは対米関係を利用するだけでなく、国内外の多様な政治・経済・外交ネットワークを駆使して、戦後日本の権力構造に食い込んでいた。フィクサーは、政財界だけでなく暴力団、右翼団体、宗教団体などとも関係し、公営ギャンブルをつうじた資金調達、新聞テレビを利用した世論形成、暴力団や労働組合を動員した社会運動への介入などにも深く関与していた¹¹⁾。またその活動は、国内にとどまらず、東南アジア、中東、アフリカ諸国、旧ソ連圏などとも結びつき、冷戦構造のなかで独自の動きを展開した。例えば、一部のフィクサーは密輸や資源取引を通じて戦後の経済復興に寄与し、またある者は反共ネットワークを活用しながら対米関係を強化すると同時に、日本の自主外交の道を模索していた。こうした手法は、戦後日本における保守政治の形成に深く影響を与え、政財界に寄生しながら権力基盤を確立する要因となった。今後はフィクサーを日米関係のみでとらえるのではなく、より広範な政治・経済・社会的視点から再評価することが求められる。

3) 戦前の軍国主義との連続性：冷戦戦略の一環としてCIAが支援した西ドイツのゲーレン機関が、旧ナチスの軍人や情報将校で構成され、戦前の対ソ諜報網や組織を継承していた¹²⁾ のと同じく、G2やCIAのもとで復権した日本の旧軍人や右翼勢力も、軍

10) 一例として、伊藤が編集した笹川良一『巣鴨日記』（中央公論社、1997年）、『笹川良一と東京裁判』（全3巻と別冊、中央公論社、2007-2008年、2010年）などは、戦前の軍国主義、東京裁判、戦後日本の政治に関する笹川の証言を記録した貴重な資料である。しかし、これらをもとにした本格的な学術研究や検証は十分に進んでいるとはいえない。

11) David E. Kaplan and Alec Dubro, *Yakuza: Japan's Criminal Underworld*, (revised edition) Berkeley, University of California Press, 2012は、日本の暴力団（ヤクザ）を、社会学的視点から分析した著作である。本書は、ヤクザと右翼暴力団が戦後日本社会で「見えざる政府」として支配力を持ち、その勢力を海外にも拡大してきた実態を描いており、戦後の右翼・暴力団・国家機関の結節点として児玉誉士夫に注目している。

12) ゲーレン機関については、ゲーレン自身による回顧録『諜報・工作——ラインハルト・ゲーレン回顧録』（赤羽龍夫監訳、読売新聞社、1973年）のほか、James H. Critchfield, *Partners at Creation: The Men Behind Postwar Germany's Defense and Intelligence Establishments*,

国主義的な思想や人脈を戦後に持ち越していた。なかでも大物政治家・フィクサーへと成長した岸、児玉、笹川は、国家主義的な理念を単に継承・復活させるのではなく、冷戦構造に適応する形で修正し、戦後の権力基盤を築いた点で特筆される。具体的には、岸は合法的な政治手法をもって再軍備と統制経済を推進し、児玉は裏社会で資金と武器を掌握しながら自主防衛を模索し、笹川は平和活動をつうじて旧大日本帝国の版図に人道的支援を展開した。彼らは、アメリカの反共政策を利用しつつも、本質的には戦前の軍国主義・国粋主義の延長線上で行動していたと考えられる。三者の戦後のつながりについては不明な点が多いが、安保闘争など特定の場面においては協力関係にあったことが確認できる。例えば、岸が進めた安保改定の裏側では、児玉が暴力的手段を用いて反対派の活動を抑え込む動きを見せた。また、笹川も政界工作や資金援助を通じて岸を支援したとされる。しかし彼らが戦後を通じて一貫した関係を維持し共通の政治戦略を持っていたのかは定かではなく、さらなる検討が求められる。

なお児玉については、有馬（2013）の研究から、戦後日本の防衛政策をめぐってCIAと緊張関係にあったことが指摘されたが、その根底にある児玉の自主防衛への執着が、どのような思想的背景のもとで形成されたのかについては十分に検証されたとはいえない。児玉の生い立ちや民族的出自については、大下による最新の評伝（2025）でも明確にはされておらず、仮に一部で指摘されているように児玉が在日朝鮮人のルーツを持つとすれば¹³⁾、児玉の目指す日本の自主防衛とは、戦前の軍事体制の焼き直しではなく、朝鮮半島や東アジアの民族運動との関係を再構築する意図を含んでいた可能性もある。それはアジアの独立勢力を支援しながら戦後日本の勢力図を再構築する試みと解釈することもでき、戦前の大東亜共栄圏や戦後の反共戦略とも異なる「アジア秩序の再編」を目指した新たなフィクサー像を浮かび上がらせる。いずれにしても戦後日本におけるフィクサーの影響力をより詳細に分析するためには、個々の経歴だけでなく、彼らを取り巻く組織やネットワークの実態を解明することが不可欠である。

Naval Institute Press, 2003が、戦後ドイツの国防および情報機関の再建におけるゲーレン機関の役割を分析している。また、Badis Ben Redjeb, The Gehlen Organization, Nazis, and the Middle East, *Journal of Intelligence History*, vol.18, no.2, 2019では、ゲーレン機関の旧ナチス人脈が中東地域の諜報・軍事戦略にどのような影響を及ぼしたかが論じられている。

- 13) 畠山清行著『何も知らなかった日本人』（青春出版社、1976年。祥伝社、2007年復刊）では、児玉誉士夫の出自に関して「児玉は福島県安達郡本宮生まれとなっている。ところが実際は、誰も知らない。本当に日本人だろうか」と、その出生に関する謎を指摘している。また、城内康伸『猛牛と呼ばれた男―「東声会」町井久之の戦後史』（新潮社、2011年）では、児玉の右腕で在日韓国人二世であった町井久之（鄭建永）と児玉との密接な関係が描かれている。

おわりに

本稿では、戦後日本のフィクサー研究の動向を整理し、その成果と課題を検討した。戦後日本のフィクサー研究は、アメリカの機密文書の公開を契機に進展し、とくに対米関係の視点から実証的な分析が行われてきた。しかし、彼らの活動をより包括的に理解するためには、冷戦下の地政学的な要因に加え、戦前の軍国主義的な思想や人脈の継承、国内政治・経済構造との結びつき、さらには国際的な影響圏での役割を再評価する視点が求められる。また本稿では十分に触れられなかったが、ロッキード事件以後の日本のフィクサーに関する研究（渡邊恒雄、許永中、葛西敬之など）は、森功ら気鋭のジャーナリストたちが近年精力的に取り組んでおり¹⁴⁾、その成果は、従来の暴露的なスタイルを超えて実証的な検証をともなっている。ジャーナリストの粘り強い調査力と歴史学の学術的検証が相互に補完し合うことで、フィクサーの活動実態をより立体的に捉えることが可能となる。今後のフィクサー研究には、学術研究とジャーナリズムの垣根を超えた協力が鍵となるだろう。さらに、フィクサーという概念そのものの学術的定義を明確にする必要もある。これまでフィクサーは、政治や経済の裏で影響力を行使する存在として漠然と語られてきたが、その具体的な範囲や役割は研究によって異なり、いまだ統一的な定義は確立されていない。戦後日本のフィクサーを歴史的に位置づけるためには、個々の事例研究にとどまらず、フィクサーの定義や権力構造との関係を理論的に整理し、その分析的枠組みを明確にすることが重要である。

参考文献

- 有馬哲夫『CIAと戦後日本：保守合同・北方領土・再軍備』平凡社，2010年
 猪野健治『兄玉誉士夫の虚像と実像：現代の黒幕』創魂出版，1970年
 大下英治『兄玉誉士夫：黒幕の昭和史』宝島社，2025年
 加藤哲郎「戦後米国の情報戦と60年安保：ウィロビーから岸信介まで」（『年報 日本現代史』）第15号，2010年
 竹森久朝『見えざる政府：兄玉誉士夫とその黒の人脈』白石書店，1976年
 立花隆「兄玉誉士夫とは何か」（『文藝春秋』第54巻5号），1976年
 テッサ・モーリス＝スズキ著；谷川舜訳「民主主義の境界は隙だらけ：スパイ活動，密輸などで形成

14) 一例として、森功『許永中：不死鳥の如く』（講談社，2010年），『国商：最後のフィクサー 葛西敬之』（講談社，2022年），佐高信『田中角栄伝説』（講談社，2021年）魚住昭『渡邊恒雄：メディアと権力』（講談社，2002年）など。また森功ほか『誰も書けなかった日本の黒幕』（宝島社，2024年）はロッキード事件以後に影響力をもったフィクサーたち数十名を記事ベースで特集したものである。

された日本の貫戦期レジーム」(『インテリジェンス』16号), 2016年
徳本栄一郎『田中清玄: 二十世紀を駆け抜けた快男児』文藝春秋, 2022年
名越健郎『秘密資金の戦後政党史: 米露公文書に刻まれた依存の系譜』新潮社, 2023年
山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店, 2013年